ヒカリトヤミノゲーム

川犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒカリトヤミノゲーム

【Ｎコード】
Ｎ７７７８Ｇ

【作者名】
川犬

【あらすじ】
ヒカリノゲームとは強い光を負けた人の目に当て、失明させるという残酷な遊びで、ヤミノゲームとは夜の墓場で肝試しをすることである。品川亮はそれを友達と見ることになった。ねえ、君ならどっちがしたい？

プロローグ

ここは自宅だ。家にはだれもいない。母は、友達の誘いで、泊まりに行っており、父は、会社だからだ。亮は、ベットの上で高校での出来事を思い出す。

「亮！ちょっと。」
「なんだ？」
出口頑太が手招きする。それに、亮は反応して、頑太のほうへ歩む。
頑太の手には、二本のビデオテープがあった。それに、視線がいく。
「これなんだけどさぁ、ちょっとおかしいのが、映っているらしいんだよ。」
「へぇ～、で？」
「俺一人じゃ、見るの怖いから、今日の帰りおまえんちで一緒に見ようぜ。」
「それは、何？」
「ひとつはヤミノゲームっていうやつで、もうひとつはヒカリノゲームってやつの実際にあったのを映したものなんだってさ。」
「へえ」
「だから、みよーぜ？な？」
頑太の性格からして一人でホラー系のビデオを見るのはおそらく無理だろう。だから、亮に一緒に見ようと言ってきたのだ。
「わかった。すぐこいよ。」
「りょーかい。」
それから、すぐに3時限目の始まるチャイムが流れてきた。
あわてて、自分の席に座る。ここは、私立の高校だ。かなり厳しい。なので、少しでも問題を起こすと即、停学である。

３時限目は歴史だった。それも世界史で、亮の一番嫌いな分野だ。しかし、頑太は得意だ。まあ、亮自身、自称理系なので、世界史が苦手でも、別にいい。世界史の時間はとても長い。実際は、他と時間は変わらないのだが、長く感じられる。亮は早く終わらないかと考えている。ただひたすら、黒板の文字を移す作業が繰り返される。それ自体、すると頭が痛くなることもある。ある意味、地獄だ。その地獄から、抜け出せるのは、授業が終わる瞬間、つまり、チャイムが鳴る瞬間だ。

今日もそのチャイムのおかげで、解放された。

キーンコーンカーンコーン・・・

頭に何度もこだまする。

あぁ、おわった。

次の時間は、化学でそのあと、昼食を取り、体育が２時間続いて学校が１日分終わる。亮は世界史以外は、すべて得意分野と言ってもいいくらいできる。

化学が始まった。教師が面白いことをいう。亮はふふふと笑った。

キーンコーンカーンコーン・・・

やっと終わった。部活はやっていないので、そのまま家に直行だ。あのビデオを見ることが、楽しみだ。亮は自転車にまたぎ、坂道を駆け抜けた。

亮は思い返すのをやめ、ベットから降りた。

そろそろ頑太が来るころだ。

ピーンポーン

ほら来た。

亮は、玄関に向かった。頑太はなんだか不気味な笑顔で中に入ってきた。それに一種の不安を覚えたが別に気にしなかった。

video

「早速みよーぜ！」
「ちょっとまてよ。」
頑太はかなり見たがっている。一人じゃ見れないくせに他の人と一緒に見るとなるといつもこうだ。そして、見終えた後に汗だくで全然怖くないというのだ。その時は大抵、あっそだのへぇ～だので、スルーする。
亮は頑太の持っているものを見た。
手には紙袋がある。おそらくその中に、あの2本のビデオテープが入っているのだろう。ビデオテープの内容はおそらくショーもないことだと思う。
ただ単に、怖がらせようと作ったフィクションだろう。この世で、ユーレイなんていうわけないのだ。亮はそんなことは信じない。みんなも信じていないのだろう。テレビでたまに、心霊写真や心霊ムービーなどを放送したり、除霊だとかいって、何かを唱えたりするものを放送したりするのだ。2度くらい見たことがあるが下らない。熱中してみている人の気持ちが全く理解できない。
頑太は亮の部屋に何の断りもなく入った。いつものことなので、亮はやれやれと小さな声で言いながら頑太に続いて自分の部屋に入った。
中に入ると早速頑太はビデオテープを取り出す。ふつうはビデオテープではなく、DVDにしてほしいところだが、別に面白いものを見るわけではないのでいい。
前に楽しみだと言ったがそれは頑太が来るから楽しみなのだ。頑太が来ない状態で見てもおもしろくもなんともない。ホラー系をみている、頑太のリアクションが面白いのだ。
「ここに入れるんだよな？」
いつの間にか準備を終えたのだろうか、頑太はビデオテープを手

に持っている。
「そうだよ。」
確認を終え、頑太はビデオテープを入れて、テレビのチャンネルをビデオ2にした。
そして、巻き戻しをして、再生ボタンを押した。
「それどっち？」
「ヤミノゲームだと思う。」
「確信ないのかよ。」
そう言われ、頑太は頭をポリポリと書いた。
「・・・ない！！」
ハッキリ言った。それに亮は爆笑した。頑太は顔を赤らめる。
「わかったわかった。ほら始まるぜ、見よ。」
「おう！」
テレビの画面を見る。そこには暗闇の中で中学生ぐらいの男たちがじゃんけんをしているのがうつった。
暗闇ということはおそらくヤミノゲームなのだろう。
「これ、ヤミノゲームだ！！」
頑太はにんまりと笑った。いつも見ている笑顔だ。だが、なぜだかまた、よくわからない1種の不安が亮を襲った。
なんなんだ？いやな予感がおこりそうな気がする。・・・。
とりあえず今は忘れて、テレビの画面に映っている（ヤミノゲーム）をみることに専念することにした。

「よし、じゃんけんでチーム決めようぜ。」
「おう！」
中田剛志がそういうと、上崎健太が賛成した。
他の人も賛成する。
早速じゃんけんが始まった。
「じゃんけんポン！！」
一斉に口をそろえてそういう。
剛志と健太は同じチームになった。
これをチームEと名付けた。
「はぁ～、なんでお前と一緒なんだし。お前とじゃたよりねー。」
星野浩司は中木今太郎に向かってそういった。
それを言われ、今太郎は少し悲しむような表情になる。
彼らをチームBと名付けた。
「まあまあ、いいじゃないか。」と、吉永平治にそう言われ、浩司は小さな音で舌打ちをした。どうやら了承したようだ。
「ふふふ・・・。」
それらを見ていた、飯田修平は笑った。
平治と修平は同じチームになっている。
これをチームCと名付けた。
白井裕也は浩司と今太郎のことに一切興味を持たなく、地面に絵を人差し指で描いていた。
「何書いてんの？」
「髑髏。」
「うえ・・・。」
原洋平は聞かなければよかったと思った。この後のヤミノゲームがより怖くなる。
洋平と裕也は同じチーム。チームAと名付けられている。

「髑髏はこう書くんだよ。」
坂本陰がさらにグロく描く。今度はみんながひいた。
「そこまでリアルに描かなくても・・・。」
「え？あ、はい・・・。」
栗原智紀にそう言われ書くのをやめた。そして、足で絵を消した。
陰は将来画家になるのを目指している。しかし、絵はうまいが少々行き過ぎた絵を描くことがあるのでその時は止めている。
陰と智紀はチームDだ。
「よし、このチームでいいな？」
「イェスボス。」
剛志がいいかと聞くとみんなは意味不明なことを言った。
「誰がボスじゃぼけぇええ！！！！」
あはははは・・・。笑いが飛び交う。
「じゃあ行こうぜ。」
浩司がそういうと、今太郎は顔を青ざめた。足もがくがく震えだす。
それに、陰が気づいてニヤニヤしだす。
「あれれ～？今太郎まさか怖いのぉ？？」
「こ、怖くなんか、怖くなんかないもん！」
今太郎は幼稚な言葉を発し、今度は顔を赤らめた。
「ようちだな～。」
「う、うっさい！！」
陰は今太郎キレたのを見て、手を合わせた。
「へへへ、ごめんごめん。」
今太郎の目つきが元に戻る。
「まず俺達からだな・・・。」
洋平はそうつぶやいた。裕也もうなずく。
「じゃあ、いってくるぜ！」
「ちょいまちー！」
「早く来いよ～！」

洋平はあっという間に懐中電灯をもって向こうへ行ってしまい、裕也があわてて追いかける。そして、墓場に入った。

そのとき、墓場のどこかでにやりと笑う何かがいた。

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＡ

ここは、墓場だ。この遊びをヤミノゲームと名づけているが、実際はただの肝試しだ。

ルールは簡単だ。このどこかに隠されているろうそくを探し出して、それに火をともして、それが消えないうちに、墓場から外に出ればクリア。もし、その時にほかにクリアしたものがいれば、引き分けとなる。

洋平自身、別に勝ち負けはどうでもいい。このスリルさえ、味わえさえできればいいのだ。

もともと、この遊びはスリルを味わうために作った遊びだ。

洋平はライトの光をあたりに当てまわした。ろうそくを探すためだ。裕也も探している。

「見つかんねえな～・・・・。」

「う、うん・・・・・・。」

裕也の口調がなぜだか少し緊張気味だ。まあ、それも仕方がないことだろう。

ここは、墓場だからだ。洋平は平気で、逆にわくわくしている。今にも幽霊が出そうな雰囲気が漂っているからだ。

「ここにも、ないよ・・・・。」

「よし！次行こうぜ！！」

洋平が大声でそう言うと裕也はこう言った。

「し、静かにしようよ・・・・。」

「なんで？」

裕也がそういう理由はもうわかっている。きっと、幽霊が本当に出るとでも思っているのだろう。ばかだな・・・・。

「そ、それは・・・・。」

「それは？」

「・・・・。」

「黙り込んでじゃわかんないな～～。」
「なんでもないよ・・・・。」
「本当かな～？」
「ほ、本当だよ！あ・・・・。」
「お前も大声出してんじゃんか。」
「・・・もういいよ。おおごえだしても・・・・。」
ふふふ・・・、洋平はそっと裕也が分からない程度に小さな声で笑うと、再びろうそく探しを開始した。それにしても、裕也はこういう人なんだなと思った。裕也は友達などが大勢いるところでは、怖がっていないが、友達が少なくなると怖がる。本当に面白い性格だ。本人は気づいていないだろうが、こういう性格なのだ。
「ね、ねえ・・・・。」
「なに？」
「さっきから・・・うしろに何かいるような気がするんだけど・・・・。」
「ふ～～ん・・・そんなわけな」
そう言いかけて、言うのを止めた。自然と足の動きが早まる。
洋平はそっと小さな声で、それでもって焦りを合わせた声で裕也に言った。
「走るぞ・・・・。」
洋平は自分がこんなことを言ったのに驚いた。そして走り出す。
「ま、まって・・・・。う、うあああああああ！！！」
裕也の悲鳴が聞こえてきた。脳裏にいやな、想像してはいけないような妄想がよぎる。
洋平は振り向くことなく走り続けた。さっきの、幽霊の件は訂正だ。
幽霊をまだ見てはいないが信じる・・・・。
・・・？さっきのをいまなぜ自分は幽霊だと思ったんだ？今自分が思ったことにも疑問を持った。必死に何か得体の知れないものから逃げながら。少なくとも他の人が見ればそう見えている筈である。

darkgame－teamA　end

さっき振り向いたときに確かに何かいた。赤い光のようなものがこっちをにらんでいるように見えた。そして裕也がやられて、これはもう絶体絶命だ。

「ぜえぜえ・・・。」

洋平は息を切らしても尚、走り続けていた。ここで立ち止まったら終わり、というような気がしてならない。もうろうそく探しのことなど頭の外に追い出してしまっていた。その代わりに、さっきの赤い光のようなものが頭の中に入ってきた。

何度も立ち止まろうと思った。しかし、立ち止まれない。

誰か助けてくれよ・・・、と叫ぼうとしても息を切らしていて声が出ない。

「うあ！！」

不意に洋平は転んだ。何かにつまずいたようだ。しかしその何かを見た瞬間、体が硬直してしまった。洋平の目に映ったのは、手だった。普通の手だった。しかし、その普通の手が地面から生えていて、洋平の左足首をつかんでいる。

「や、ヤメテクレーー！！！！」

声が出た。息が切れて何もしゃべれないはずなのに大声が出せた。その理由は簡単である。洋平は必死だったのだ。

洋平は地面に吸い込まれるようにして引きずり込まれていく。手で負けずまいと必死に抵抗するが力の差が歴然としていた。

「ア、、・・・ァァ・・・。。。」

涙すら出せない。どうやら、もう泣く力さえ残っていないようだ。

そしてその数秒後、ついに、洋平はこの世からどこかへと逝ってしまった・・・。

裕也は洋平が引きずり込まれている光景を見ていた。いや、見て

しまったというほうが適当だろう。
　さっき、悲鳴を上げたがあの時は墓石に足があたって悲鳴をあげたのである。それなのにもかかわらず、洋平は走っていってしまった。それを必死にして追いかけていたらこんな現場に出くわしてしまったのである。
「洋平・・・。」
　裕也はそうつぶやき、後ろにくるりと回転し、一目散に逃げようとした。が。
　振り向いた瞬間、目の前に何かいることがわかった。目の前に、老人のような人が一名いる。しかし、それはおそらく人間であって人間でないだろう。
「あわわわ・・・。」
　その老人の大半は白骨化しているのだから。だから、人間ではない。その人間ではないものが1体いる。そして何よりも、手が無かった。
　今度は、後ずさりをした。しかし、何かに躓いて転んだ。
　裕也はその何かは見なくてもわかっていた。
「ヒサシブリノオキャクジャナァ・・・。」
　白骨化したものはそういった。その声はこの世のものではありえないような不気味で、低かった。
　裕也は引きずり込まれていく。抵抗はしなかった。抵抗をしても無駄だと思ってしまったからであろう。さっきの洋平が引きずり込まれていくのを見てしまったのだからもう半ば諦め状態だ。それに、抵抗していなければ助かるかもしれない。
　しかし、裕也も・・・・・・・・・・・・・・・・・逝ってしまった。
　これで、二人目である。
　白骨化したものは、いつの間にかよみがえるかのように肉づいてきていた。
「モウスグヨミガエルゾ・・・。」

そう呟いて。

darkgame－teamB

「・・・それにしてもはやくいきてーなあ・・・。」
浩司がそうつぶやいた。その声を聞き、今太郎がこういった。
「じゃあ、もう行く？」
浩司がこっちを向く。その目はいつもと変わらない。
「だな・・・。」
いつの間にかもうみんな先にいってしまった。そう、今太郎が怖がっているせいで、最後に行くことになったのである。浩司は最後が嫌いだった。何事にも1番がよかった。だから、今太郎があまり好きではないのだ。
浩司は墓場に向かって歩き出す。今太郎は後ろからくっつくようについてきた。もう、チームAがスタートしてから1時間が経っていた。
今太郎の顔がかすかに青ざめている。浩司は小さな声でへへへ、と笑った。今太郎は気づかない。
墓場の入り口の前に来た。まだ誰もきていない。つまり、まだ勝つ可能性はある！今太郎には悪いが1人ででも、今太郎とはぐれてでも、1位になりたい。なので、少し歩くペースをあげた。
「ねえはやいよおおおお」
「がんばってついてこよう。」
「・・・はあーーい。」
予想通りに今太郎は、早くも疲れているようなそぶりを見せた。体力の無さ過ぎだ。今太郎は確かパソコン部だ。その理由は、スポーツが苦手だかららしい。今、はっきりとスポーツが苦手だということが証明された。まだ歩き出して3分も経っていないのである。サッカー好きの浩司には体力の限界というものをあまり知らなかった。少なくとも、歩いて疲れるということは決して無い。走って疲れるということはずっとしていればあるかもしれないが。

周りはライトをつけていなければ何も見えないというぐらい、暗かった。闇に包まれた感じである。そこをスタスタと歩くとその音だけが響きわたり、そして闇の中に消えていった。
「ろうそくちゃんはどこかなあ？」
ろうそくはまだ見つからない。どうやら、かなり難関のようだ。何しろ、今は夜なのだ。ろうそくを探すのにも一苦労である。
今太郎がつぶやいた。
「なんか、思ったより広いような気がする・・・。」
「ふん、気のせいだろ。」
「う～～ん、そうかなあ・・・。」
「そうに決まってるさ。」
今太郎は予想以上に浩司のペースについてこられている。この分だと2人でゴールすることになるだろう。1位になれるのなら別にそういうのはどうでもよかった。
「・・・ねえ、知ってる？」
「ん？何を？？」
浩司は振り返らずに話すことにした。話している時間もろうそく探しに当てたいからだ。
「ここの墓場のうわさだよ。」
今太郎の声が少し、低くなったような気がした。その声に浩司は少しの違和感を感じた。
「うわさ？ナニソレ？」
「・・・知りたい？」
今太郎の声に、少しの不気味さを今度は感じ取った。
「当たり前ジャン。めちゃ知りたい。」
「・・・昔、このお墓はある儀式が行われているところだったのじゃ。」
「ギシキ？」
今太郎が今度は老人のような声になったが、怖がらせるだけだろうと思い、あまり気にしないことにした。しかし、その声は徐々に

ではあるが、老いていっているような感じでもあった。

darkgame－teamB　end

「そうじゃ。ムカシ、この墓場はアルギシキがオコナワれていたんじゃ。」
今太郎の声に変な声が混じってくる。
「だからなんだよ。おれはそれが知りてー。」
今太郎は語るように話し出した。
「ソノギシきで行われたのはなぁ、生きたままのある男の手を切断して、ツちのナカニウメて、その男も一緒にウメラれた、というものなんじゃ。」
「なんのために？」
「その男の人が悪いことをシタから、キット死刑にされタンジャロ。」
「それで？」
「・・・その男の霊が今でもヨミガエロうと手と一緒にこの墓場でうろついているラシインジャ。」
浩司は笑ってしまった。
「そんなわけねーだろ！プッハハハ！！！！」
「ソレガナあ・・・。」
今太郎はかまわず話を続ける。その顔は笑っていた。浩司よりも。
「ソノオトコトイウノハナア・・・。」
浩司が笑うのをやめた。
「なんだよ、いってみろよ。」
「フフフ・・・。」
今太郎は笑う。浩司は少し怖くなってきた。ありえない。幽霊なんて、幽霊なんて！！
浩司は今太郎の方を向いた。すぐ隣にいた今太郎は、いつの間にか姿を消していた。その代わりに、老人がいる。手が無く、内臓が見え隠れしていたり、所々、血が吹き出ている。その姿に、浩司は

吐きそうになった。
「ワシナンジャヨ・・・。」
「だ、誰だお前！！」
もう今太郎は、ここにはいない。この化け物は今太郎ではない。
「こ、今太郎をどこにやった！！」
「フフフフ・・・。」
化け物は真顔になった。その顔は、笑っていたときと同じくグロテスクだった。
「や、・・・やめ・・・やめろ！！！！！」
浩司は後ずさりをした。足が震えだしてきている。そして、手も指先から、ひじまですべてがこわばっていた。
「コンタロウハコレカラスコシアトノジョウタイトオナジスガタニナッテネムッテイルジャロウナァ・・・エイエンニ。」
今太郎は近づいてこなかった。今のうちに逃げようと思った。そして、足を、震えている足を、反転させ走り出そうとする。
しかし、何かにつまずき、転んでしまった。
化け物はフフフとまた笑った。
「オマエモモウジキネムルノジャ。」
浩司は足に目をやる。そこには、普通の手が・・・・・・自分の足を掴んでいた。
「い、いやだ。いやだ。いやだあああーーーーー！！！！！」
「オヤスミ。」
地面から生えている普通の手は浩司の足をまるで、握りつぶすかのように、力を強めていった。浩司の足に激痛が走る。その痛みは尋常ではなかった。足がゴリゴリと音を鳴らす。
「わあああああ！！！！！」
浩司の足は切断され、そこから、血がドクドクと流れてくる。次に普通の手は浩司の手を掴んだ。浩司の脳裏にいやな予感が過ぎる。その予感は、見事に的中した。手は、足より短い時間で、切断され、そこからも血が出てくる。

今度は、普通の悪魔のような手は浩司の首を掴んだ。浩司はもがく。しかし、力の差は歴然としていた。普通の手に力が入り始めている。

浩司は、薄れ行く意識の中で、こう思った。このヤミノゲームをした罰だと。

遂に、浩司の首は切断され、浩司は逝ってしまった。

老人は前回よりも、幾分よみがえった。目が完璧に元に戻った。これで、目が使えるようになり、獲物を見つけやすくなった。

老人は前までは、音で獲物を探していた。だが今度からは目が使える。それは、それだけ早くよみがえることが出来るということでもあったのだった・・・。

そして、この時、墓場のどこかで今太郎はぐちゃぐちゃになっていた。

平治と修平は墓場でろうそく探しをしていた。
「ろうそくどこだよ～。」
平治はうんざりしたような口調でそういった。
修平もうんざりしている。もう３０分も歩き探しているのだ。もうそろそろ見つかってもいいころなのである。しかし、ろうそくは見つからず、しかも、ほかのメンバーにも遭遇しない。いったいどうしたというのか。
平治は座り込んだ。
「はあ・・・。俺もうへとへとだ・・・。少し休憩しようぜ。」
「えぇ！？ここ墓場だよ？」
墓場の土の上で休憩している人なんて見たことも聞いたことも無い。
「いいからいいから・・・。はあ・・・。休め休め。」
「ふふふ・・・。これはいいネタを見つけたぞ。」
「ん？今なんか言った？」
「き、気のせいだよ！」
「うんうん。そうかもしれないな。もうつかれたあああ。」
修平は笑いかけた。
「さっきから疲れた疲れたうっさいよ。余計こっちも疲れる。」
「ごめん。でも、これだけは言わせて。」
「何？」
「もう疲れていない！」
ガクッ！修平はこけた。普通なら何でやねんと突っ込みたくなってしまう。
「何でやねん！」
そして、突っ込んだ。
こうして、幾分、緊張がほぐれた。平治はいつもぼけたりして、

皆の緊張をほぐしてくれたりする。
平治が勢いよく立ち上がる。
「よっし、回復！！もういこか。」
「・・・お、おう！」
そして、またろうそく探しが始まった。
十分後。
「はあーーー。もう誰かにとられてるんじゃねえの？いったん戻ろうぜ。」
平治の提案に修平はうなずいた。なぜなら、修平も同じことを考えていたからである。もう合計４０分ぐらいろうそくを探した。しかし、こんなに探しているのに見つからないのだ。もう誰かに先越されている可能性が非常に高いのだ。だから戻ろうと平治も修平も思ったのだ。
「ん？出入り口どこだ？」
修平が首をかしげる。
「さあ。わかんねえ。」
「さあじゃ無いだろ！」
「まあ、そのうち出入り口にたどり着くだろ。気軽にいこーぜ。気軽に。」
「・・・それもそうだな。」
平治は修平の前に立った。そして、手を掲げ、歩みだす。
「よし！今度は出入り口探しじゃーーーー！！！」
「・・・。」
「おーーー！！！っていって。」
「お、おーーー！！・・・。」
修平は何かに見られているような気がして、振り返った。しかし、そこには墓石があるだけだった。
気のせいか・・・・・・。本当に気のせいなのか。それは、まだ修平にはわからなかった。

darkgame－teamC　end

平治と修平は、あちこちを見て回る。しかし、どこにも出入り口らしいところは無く、この墓場が、延々と続いているような気さえした。

「・・・なあ平治。」

「なに？」

修平の声に気がついたのか、平治はまっすぐ前を見ながら返事をしてきた。

「さっきから、ずっとまっすぐ歩いてんだけど・・・。出入り口だけじゃなくて、この墓場の終わりが見えてこないんだけど・・・。・・・・・なんか気味悪りぃ。」

平治はそれには何も答えなかった。平時の顔は少し緊張気味だった。

この墓場は、こんなに広くなかったはずだ。確か端から端まで歩いて5分ぐらいだった。それでも結構時間がかかるぐらい広いが例え夜でも迷うほどではなかった。それが、未だに同じお墓がずらりと並んでいるばかりだ。

・・・。修平はだんだん不安になってくる。

「いったいどんだけ広いんだよ・・・。平治走ろうぜ？」

「ん？あぁ。わかった。」

そして、二人は走り出す。しかし、平治にある異変が起こり始めていた。

「平治、お前ってそんなに足遅かったか？」

平治は汗を拭った。

「へ？そんなわけないよ。」

「そうか？じゃあもう少しペースあげようぜ？」

「な、なに言ってんだお前。これがもう限界だよ・・・。」

「・・・なんかおかしい。」

「おかしくないって！・・・はぁはぁ・・・。」
いつの間にか平治の荒い息が聞こえてくるようになって来た。それでも一向に、墓場の外へはいけない。修平は危険を察知した。
後ろに、何かが追いかけてくる。それは人間のようにも思えたが違うような気がする。平時の為にも少し休ませるべきか、それとも後ろの何か危ない存在から逃げるべきか・・・。
修平の判断はこうだった。
「平治！逃げるぞ！！」
「はぁはぁ・・・。な、なにいってんだおまえ・・・。はぁはぁ。」
もうピークに到達しかかっているであろう平治は後ろを振り向いた。その途端、平治は目を大きく見開いて、余計息を荒げる。そのときの平治の目は恐怖一色だった。何か恐ろしいものを見たような目でもあった。
その様子を修平は見て、修平自身もそれを察して、足を速めた。
「ま、まって！！！！！！ゲッホゲホ・・・。」
平治はパニック状態に陥った。
修平は立ち止まって勢いよく後ろを振り向く。心臓はバクバクだ。
「タスケテーーーー！！！！！」
修平は、ゴクリと息を呑んだ。
修平が見たものは、平治が地面から生えている普通の手によって、引きちぎられる地獄のような光景だった。引きちぎられた肉の塊は生々しい血を残し、地面の中へと消えていった。
続いて、ゾンビのような老人が現れる。
「だ、誰だ！！」
「フフフ・・・。オマエガシルヒツヨウハナイ。ナゼナラ・・・」
「な、なんだよ！言ってみろよ！」
そのゾンビのような赤く目を光らせている老人は、不気味に笑って、修平の足元を指差す。
そして、こう言ってきた。
「ナゼナラモウスグシヌノダカラナ。」

「い、いやだあああ！！」
「アキラメロ。フフフ・・・。」
修平は狂った。そしてわけの分からないような言葉を発しながら、暴れている。修平の足には、普通の手ががっしりと修平の足をつかんでいた。
それを必死ではずそうとする。しかし、それは無意味な行動だった。
すぐに修平の両足が切断され、鮮血が飛び散った。そのとき、尋常ではない痛みが走った。
・・・もう、修平は抵抗しなかった。
「コノゲームヲツクッテクレタアノオカタハマダコドモナノニスバラシイ。」
意識を失う直前にゾンビのような老人は赤く目を光らせて、謎の言葉を発していた。
その後、プツリと修平の意識が無くなり、冷たくなっていった。

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ（前書き）

かなり遅れました。すみません

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ

智紀と陰は暗い墓場をとぼとぼと歩いていた。その後ろにはチームＥの剛志と健太が歩いていた。そう、チームＤとチームＥは協力してろうそく探しをすることになったのである。その理由は実の簡単なもので、チームＤの智紀と陰が別に勝っても何もないから負けてもいいとのことで、することがないらしく、チームＥに協力してやっているのである。

剛志はヤミノゲームの主催者である。彼の身長は中学１年生にしては高く、体重も５０キロはある。つまり、彼は皆よりも大人的存在なのである。

「そういえば、ろうそくって誰が隠したの？」

健太が隣で聞いてくる。剛志がそれに答えた。

「おれだよ。」

「えっ！？じゃあ探す必要性皆無じゃん！教えてよ！」

「あぁ・・・そっか。わかった。」

「これで俺たち優勝まちがいなしだぜ！」

「そうだな・・・。」

剛志の元気の無さに流石に健太は気がついたのか、聞いてくる。

「どうした？さっきまでの元気はどこ行った。」

「ごめん・・・。すこし、腹がさっきから痛くて・・・。」

そう言って、剛志は腹を抱え込んだ。前で智紀と陰が振り向いてくる。

智紀が剛志の顔を覗き込む。

「・・・うーむ。顔色が暗くて見えん！」

そう当り前なことを智紀は言ったが皆スルーした。

智紀はスルーされたことには全く反応を示さず、再び歩き出した。月がやけに眩しく感じる。

陰はただ無言でずっと歩き進んでいた。彼は絵が描けなくてとて

も退屈そうにしていた。彼の1日の半分は絵を描いているといっても過言ではない。恐ろしいぐらいに集中力を発揮し、教師に注意されてもしばらく書き続けているほどだ。

剛志が立ち止まった。

「うぅう・・・。はらいてぇ・・・。ごめん。ちょっとトイレ行ってくる！」

そういって、剛志は目指す方向とは真逆の方向へ走って行った。

健太は苦笑した。

「墓場に普通トイレってあんのかよ。」

そこへ智紀が返事をする。

「さあ。」

陰は無言のままだった。

とにかく、3人にその場で残された。

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ　２

智紀たち3人はその場でしばらく待っていた。剛志が戻ってくるのを待っていたつもりなのだが、２５分たった現在、いまだに帰ってこない。

健太が大きなため息をついた。

「剛志おっそいなー。これじゃ優勝できないじゃん！」

智紀が苦笑する。

「仕方がねーだろー。もう少し待とうぜ。」

「もしかして、迷子になったのかも！」

「うーん・・・。ありえるねー。」

陰はさっきからまた地面になにかを描いている。絶対に気味の悪い絵に決まっているのであえて見ないことにした。

さらに１０分が経ち、健太が立ち上がった。

「俺、ちょっと探しに行ってくるわ。」

「え？あ、あぁいいよ。見つけたら1発殴っとけ。」

「おっけー！最高にスカッとするだろうな。」

「・・・できた。」

陰がここではじめて声を出した。智紀が首をかしげる。

「え？」

陰をみると・・・・・・・・やはり、気味の悪いものが視界にうっすらと入った。暗いのが不幸中の幸いである。陰が描いたのは生首。・・・吐き気がしてくるぐらい気味が悪いものだ。そこで、陰に何を言っても完全に自分の世界に陰は入り込んでしまっているので、反応すら示さない。ある意味、おかしな人間だ。

「じゃあ、探してくるよ。」

智紀は、はっとなり返事をした。

「お、おう。」

健太は走り去って、闇に溶け込んでしまった。懐中電灯の光さえ

見ることができない。それに、少しの違和感を感じたのだが気にしないことにした。
さらに15分たち、流石に智紀はおかしいことに気がついた。さっきから、ほかに誰とも会っていない。ここの墓場はそれほど広いのか。昼間見ている分にはそこまで広くはないはずだ。それに、今度は健太までもが帰ってこなくなった。なにかあったのか。あってしまったのか。すこし、恐怖というものを感じた。
隣にいる陰はただボーっと虚空を見つめていた。
「まだかな・・・。」

そのころ、健太は墓場をさまよっていた。おかしい。何度移動しても同じところへ戻ってしまう。戻されてしまうのか、方向感覚が鈍いのか。できれば、方向感覚が鈍いという選択のほうがよい。しかし、実際は逆だった。
健太は何かにぶつかり勢いよくばたりと倒れた。その何かは今度は健太の足首をつかんできた。健太はその何かを見た。
「っ！！」
声にもならない悲鳴を上げたあと、健太は必死にもがいた。
「ぁ・・・ぁあ・・ぁあああああああ！！！！！」
恐怖は頂点に達し、ついにものすごい健太の悲鳴が周りに鳴り響いた。しかし、その悲鳴は突然ぷつりと途絶えた。そこには血の匂いがいやなほどに漂っている。
老人が悲鳴があった場所に現れた。
「フフフ・・・モウスグジャ。アト2人・・・フフフ・・・。」
老人はほぼ普通の老人の姿と同じになっていた。そう、アトスコシデコノロウジンハヨミガエルノダ。

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ　３

剛志は墓場を思いっきり走っていた。そして、立ち止まりにやりと笑った。あいつらとは、もう、会うことはないな・・・。
「おい。これで、俺は、助かるんだろうな。」
どこの誰に話しかけているのか、それは剛志にしか分からない。
どこからともなく、手が片方だけない普通の老人が現れた。
「フフフ・・・。オマエハバカジャナ。」
「な！」
剛志は何が馬鹿だ！と、言い返そうとしたが、それよりも、足が何者かにつかまれていることに気が付き、下を向いた。そんな・・・。俺はこいつに協力してやったはずだ・・・。なのになぜ・・・。
「マダワカラナイカ。」
「な、何がだよ！！」
「オマエハワシニダマサレテイタンジャヨ。」
「お、おい・・・。うそだろ・・・？助かるって・・・あれは・・・嘘だったのかよ・・・。」
「フフフ・・・。コノバカモノガ・・・。」
老人の表情が変わった。それは・・・笑っていた。剛志はそれに恐怖する。頭がおかしくなりそうだ・・・。
足に激痛が走った。剛志は絶叫する。
「フフフ・・・。」
剛志は必死になって老人に助けを求めた。
「助けてくれ！・・・一生お前に協力するから！頼む！！頼むよおおお！！！う、」うわああああああああああああああああああああああああ！！！」
剛志の足が引きちぎられ、剛志はありえないような音量で叫んだ。そして、ばたりと倒れる。
「はあはあ・・・。頼む・・・頼むよ・・・。」

老人はそれには答えず、笑ったままだった。その笑顔は例えるなら悪魔のほほえみだ。そして、普通の手が今度は剛志の左足をつかみ左足が・・・

「ウヴァアアアァァアアアァ！！！」

剛志は3度目の絶叫をした。両足をなくし、逃げることが不可能になった。足が切断され、そこから暗くてよく分からないが液体が流れ出している。

「頼むよお・・・・・。」

声にさっきまでの生気はまったく感じられなかった。

老人は今度は真顔になった。

「サヨナラジャナ。」

そう言い終えた瞬間、普通の手が剛志の心臓を貫いた。素早く。手は別に鋭くはない。だが、確かに剛志の心臓を貫き、ふっと消えた。

剛志は眼をあけたまま、呼吸を止め、冷たくなっていった。

「フフフ・・・アトヒトリ・・・。」

陰は何かを感じ取ったのか突然狂ったかのように笑い出した。智紀は何があったのかと不思議に思い、そして、気味悪がった。

「お、おい・・。陰。どうしたんだよ・・・。」

陰はこちらをぎょろりと見て、こう言った。

「あいつがもうすぐ蘇るんだよ！！！アハハハハ！！！！アハハハハハハ！！！」

「な、何いってるんだ？頭大丈夫か？陰。」

その質問に陰は答えずに指を前方へ指した。

「ほら来た。」

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ　ｅｎｄ

陰と智紀の目の前には片腕がない老人が歩み寄ってきているところだった。智紀は警戒した。　陰がその老人のほうへ向かった。老人は足を止め、にやりと笑った。

「サイゴノヒトリカ。」

陰が笑いをこらえきれずに肩を震わせる。

「なに言ってんだよ。お前ら。陰、どうしたんだよ！！」

陰は智紀の言葉には反応を示さなかった。ただ、ずっと智紀を見て、にやついている。

老人が真顔になった。

「オマエモギセイニナルノジャ。」

「犠牲？何のことだ！！」

「フフフ・・・。シルヒツヨウモナイ。」

智紀は危険を感じ取り、後ずさりをしようとした。が、何かにつまずいたのか、後方へ倒れてしまった。それを見た。見てしまった。つまずいたのではなかった。ツカマレタのだ。普通の手に。

「うあぁあ！！な、何だこれ！！」

その手に次第に力が込められていく。

陰が再び狂ったかのように笑い出した。笑いすぎたのか、何かを口から吐き出していた。しかし、笑いは止まらなかった。

智紀は痛みに耐えながらもリュックサックに手を突っ込んだ。確かこの中には・・・。

智紀は、何か光るものをリュックサックから取り出し、見えないようなスピードで、地面から生えて自分の足をつかんでいる普通の手を突き刺した。ナイフである。自分の足にも貫通したがこらえた。それでも、あまりの痛みに涙がジンワリ出てきた。

老人は本気で顔をしかめ、苦しみだした。陰も笑うのをやめ、苦しみだした。

「キ、キサマ！！ヨクモ！！！アァ゛ア゛ーーー！！！」
老人の無いはずの手が突然現れ、血を噴出した。それは、赤い花が咲いているようにも見えた。
智紀は、荒い息をしながらも口を開けたままにしてしまった。そして、逃げるチャンスは今しかないと思い、片足を引きずりながらも走った。そのスピードは亀が歩くスピードの約3倍ほどだったが、老人には速すぎていた。追いつかなかった。陰も手から血が噴出し、白目になってありえないほどに叫んでいた。
智紀は、恐怖というものを感じながらも、墓場の出入り口が見えてきたので、そこから外へ脱出した。
墓場の外へ出ると、周りが暗い夜なはずなのに、太陽が智紀を照らして、明るかった。そう自分は助かったのだ。そして、智紀は安心したのか、その場に倒れこみ、意識を失った。

陰は、老人を智紀が置いていったナイフで刺して刺して刺しまくっていた。老人はもがき苦しみ、地面の下へ引きずりこまれていった。すると、陰の血液が陰の体内に戻り、陰は完全に回復した。
「智紀、ユルサナイ。」
陰は――――――頑太に似ていた・・・。

ｄａｒｋｇａｍｅ－ｔｅａｍＤａｎｄＥ　ｅｎｄ（後書き）

やっと、ヤミノゲームが終わりました。

Ｇａｎｔａ　ａｎｄ　ｉｎ（前書き）

少し短いですが、ヒカリノゲームとヤミノゲームの中間なので気にしないでください。

Ganta and in

亮はヤミノゲームをひとまず見終えて、頑太が気になった。なぜなら、頑太が陰に似ているからだ。いや、陰は頑太なのかもしれない。信じたくはなく、確証は持てないが。

頑太は、ヤミノゲームのビデオを取り出し、そして、ヒカリノゲームのビデオを入れた。

「頑太。おまえ、ヤミノゲームに出ていなかったか？」

頑太はこちらを振り向いた。しかし、表情はなぜか氷のように冷たかった。それに、亮はぞくりとした。

「・・・。ユルセナイ。」

「え？」

ものすごく小さな声だったがヤミノゲームの陰の声に似ていた。

頑太はすぐにいつもの表情に戻った。亮は何となく少し安心した。そして、今のことは聞かないことにした。聞くといやなことがおこる気がしてならないのだ。さっきの頑太の冷たい氷のような表情を思い出す。あの表情をした頑太を亮は初めてみた。自分の身が危ないと少しだけ感じた。

「よし、みよーぜ。次はヒカリノゲームだ。」

「え？あ、おう、み、見ようか。」

なぜか、亮は緊張していた。頑太はにんまりと笑った。・・・。寒気がはしった。体中を一瞬のうちにして駆け回った。心臓の鼓動が少しずつ早くなる。

「ん、どうした？」

「な、何も。そ、それより早く見ようか。」

「あぁ。」

いつもと様子がおかしい。いつもなら、見る前に怖いだのなんとかかんとかいうのだが、いや、仮に言わなくとも強がったりはするのだが、今回は早く見たがっている。オカシイ。

亮は思い切って聞くことにした。
「なあ、頑太。」
「始まるぞ。ヒヒヒ・・・楽しみだ。」
どうやら、頑太は亮の声が聞こえていないようだ。それに不気味に笑った。今度ははっきりと不気味に笑った。いつもと笑い方も完全に違っていた。
頑太は勝手にリモコンの再生ボタンを押した。
・・・・・・・。
ヒカリノゲームが始まった。
その時、亮は気づいていなかった。外が暗闇に満ちていることを・・・。

ｒｉｇｈｔ　ｇａｍｅ（前書き）

さあ、ヒカリノゲームの始まりです。

right game

智紀はあの墓場に再び来ていた。あれから、1年が経っているのにもかかわらず、墓場は、昔のままだ。ほとんど変わっていない。その墓場に、8人の墓石が追加されていた。あの・・・ヤミノゲームをした8人である。陰はまだ見つかっていない。行方不明だ。それにしても、あの時の陰はおかしかった。狂っていた。壊れていた・・・。

智紀は花瓶の中の古い水を新しい水に取り換えて、枯れた花を枯れていないきれいな花に取り変えた。時刻は4時43分。線香に煙を立たせ、墓石の前に置いた。そして、まだ新しい墓石に水をかけ、手と手を合わせた。

時刻4時44分・・・。

智紀は、すべてのことを終わらせて墓石が並んでいる道をゆっくりと歩いた。しかし、何かに躓いて転んだ。智紀は足をみる。そのとたんに一年前の恐怖が一気に戻ってきた。

「う、うそだろおぉぉぉぉ!?あの老人は死んだんじゃっ!?」

智紀の両足をつかんでいるのは、普通のニンゲンの手だった。何一つおかしな点はない。手だけに関しては。しかし、その普通の手が地面から生えてきて、智紀の両足をつかんでいるのだ。ものすごい力で。そして、抵抗する間もなく、智紀は地面の中へ吸い込まれていった。

時刻は4時44分44秒だった。

智紀は寒気がして目を覚ました。目をあけると誰かがこちらの顔を覗いていた。・・・懐かしい顔と声だ。

「ぅ・・・ん?」

智紀が声を出すと、その人はふうとため息をついた。

「智紀、やっと目を覚ましたか。お前なんで気絶したんだよ。」

「・・・え？っていうか、おまえは・・・！」
そう、目の前にいるのはあのヤミノゲームをしていた9人だ。生きている。みんな生きている！しかし、そう思うのもつかの間だった。あり得ないのだ。一度死んだ奴らが生き返るはずがない。そんなこと・・・非論理的だ。しかも、陰もその9人の中にいた。絵を描いていた。
智紀は陰を睨んだ。陰はそれに気づいていない様子で、絵を黙々と描き続けている。今は夜だ。それに、寒い。こんな夜に墓場でいったい・・・。
剛志は顔を軽く顰めた。
「なんだよ。何がおまえは・・・！だよ。それより、早くやろーぜ。チーム決めるためのじゃんけん。」
「「おぉーー！！」」
陰と智紀以外の皆が大きな声で返事をする。それが墓場全体に響いた。・・・何だか嫌な予感がする。そう、ヤミノゲームをやった時と同じ・・・。少し違うがそれは、智紀が気絶したということになっているからであろう。・・・タイムスリップしたのか？
智紀は戸惑いながらもじゃんけんをした。陰も一応絵を描くのをやめ、じゃんけんをした。

ｒｉｇｈｔｇａｍｅ　ｓｔａｒｔ（前書き）

あ、言うの忘れていましたが、ヒカリノゲームでは智紀の一人称で話を進めていきます。

rightgame start

じゃんけんの結果、智紀と剛志、今太郎と浩司、健太と陰、修平と裕也、平治と洋平に別れた。あの時とは、そこだけは違っていた。・・・この後のことを知ればそこだけではなくて、ここから違うと智紀は気づけたのかもしれない。

剛志は智紀を細い目で見た。

「よろしく」

そう述べたあと、握手を求めてきた。とりあえず、智紀はぎこちなく握手をする。剛志の手は大きかった。

「おまえかよ！たよりねーー」

そう文句を告げているのは、浩司である。今太郎に向って人差し指で指さしながら、大きな声で言ったのちに、ひざまずいた。かなり、落胆しているようだ。まあ、どうでもいいが。

今太郎はなんだと！などと言い返すのかと思いきや、無言で下を向いている。なんだか、今太郎がかわいそうに見えてきた。これまた、どうでもいいが。

「まあまあ、いいじゃないか」

浩司は、平治に言われ、ちっと舌打ちをしたと思いきや、わかったよなどと言った。

「ふふふ・・・」

修平の笑い声が聞こえてくる。彼の笑いのつぼは見たと少し違い、今のような場面で笑う。そんな、修平のチームの人物である裕也は、地面になにやら絵を描いていた。隣で洋平が不思議そうに見ている。

「なにかいてんの？」

「白骨化した老人」

「うえ・・・」

白骨化した老人・・・。いやな予感がする・・・。

洋平は聞かなければよかったと思っているだろう。この後のヤミ

ノゲームがより怖くなるとも思っているはずだ。
「違うよ。ハッコツカシタロウジンはこう書くんだ」
その発言を聞いて、智紀はドクンと自分の心臓が聞こえたぐらいな状態になった。息をのむ。
それは、陰の声だった。
陰は、地面に白骨化した老人の絵を描く。それは、恐ろしい速さで出来上がった。
「・・・」
地面に描かれた絵は、あの時の老人という名の化物がまるで、白骨化したような代物だった。
皆も気味悪がっている。・・・わけではなく、目を輝かせていた。
「すげーな！！おまえこんなにリアルに描けるのか！！」
健太はそう言った。思わず、智紀は自分の耳を疑った。なんだって？すげーなだって？おかしい・・・。
智紀自身の記憶と照合しない。ここは、確か、皆がひく所だ。なのに、皆、目を輝かせている。いったいどうなっているんだ。やはり、陰の仕業か、あるいはあの老人の仕業なのか。どちらにしても、確実に智紀は殺されるという負の思念を捨てずにはいられなかった。まず、タイムスリップした時点でおかしい。そして、皆の言動が微妙に違ったりしているのだ。そして、陰がいる。陰は無表情で突っ立ているが、時々にやりと笑っているように見える。・・・タスケテクレ。
裕也は、目を輝かせた後に、こう言った。
「じゃあ、はやいとこ、ヒカリノゲームをはじめよう」
・・・？ちょっとまて、ヒカリノゲームだって？ヤミノゲームだったんじゃないのか。ヤミとヒカリでは正反対だ。
智紀は、夢でも見ているのかと思ったが、それはない。全てが、・・・何もかもが、リアルだったからだ。いったいどうしてもうなったのだろうか。しかも、自分だけ・・・。
智紀は陰をちらりと見た。陰はこちらを見て、笑っていた。

ｒｉｇｈｔｇａｍｅ　１

背筋が凍りつくようにぞっとした。智紀は裕也に待ったをかけた。
「おい裕也！おかしいよ。俺らがやるのはヤミノゲームなんじゃないの？」
その時、裕也の目が大きく見開いてこっちをギロリと睨みつけてきた。相手は蛇で、自分はウサギかなにかのように思わず硬直した。
「ヤミノゲーム？俺らがやるのはヒカリノゲームだぜ。何言ってんだよ」
剛志は疑問の眼差しでこちらを見てくる。
「なんなんだよ・・・それ・・・」
そう言うと、剛志は智紀にあるものを渡した。
「・・・何？これ」
「レーザー銃に決まってんだろ・・・。本当に頭大丈夫か？まあいいか、一応ルールだけもう一度言ってやるよ。そのレーザー銃でできるだけ他チームの目を打ち抜くんだ。それだけ」
背筋が凍ってカチカチになるようにぞっとした。心拍数が上昇する。
「ちょっとまて・・・それじゃあ、殺人ごっこみたいなもんじゃないか！」
「はあ？殺人ごっこだよ。当たり前だ」
・・・。・・・・。・・・・・・。
しばらく、沈黙が続いた。おかしいおかしいオカシイ。人を殺す人を殺す人を殺す。殺人殺人殺人。メヲウチヌクメヲウチヌクメヲウチヌク。だんだん頭がおかしくなっていくような錯覚がした。
皆、智紀に構うことなく勝手に散らばっていった。凶器を持って。
「俺たちも移動するぞ。１０分後にバトル開始だ！いやあ、楽しみだ」
「・・・おかしいだろ」

「はあ？何が」
智紀は剛志を睨みつけた。
「人を平気で殺すって！？そんな勝手に殺人ゲームをしていい世界なの！？ここは！！」
次の瞬間、剛志はこんなことを言った。
「何言ってんだ？人を殺していい世界じゃないのか？それに楽しいじゃん。コロスのって」
「な・・・なわけないだろ！！俺はやらないよ！そんな遊び」
「馬鹿か、おまえは？やらなければ、陰に殺されるぜ」
陰。そいつは一年前、俺の仲間を殺した。そして、俺を殺そうとした。消そうとした。
「陰にそんなことができるわけ」
「ある。あいつはなんたって殺し屋だぜ？殺せるに決まってんだろ」
「でも・・・でも・・・！！」
「もういい。早くしないと時間がなくなる行こうぜ」
智紀は無理やり剛志に引っ張られて連れ去られていった。剛志と智紀とでは体格の差が一目瞭然なので、どう抵抗しても無駄だった。
智紀はヒカリノゲームを拒絶することをやめた。・・・陰さえ殺せさえすれば、きっとこの世界から脱出できるはずさ。きっと。きっとね。
レーザー銃を力強く握りしめた。

連載中止のお知らせ

本当にすいません。はい、本当にすいません。最近、学校でテストやら何とかやらで忙しいのでこのヒカリトヤミノゲームを連載中止させていただきます。もしかしたらも、おそらくもうないでしょう。この小説を読んでくださっていた皆様、本当にすいませんでした。その代わり、現在は、「世界を救う高校生!?」と「Ａｑｕａｖｉｔ」と「Ｍｙ　Ｗａｒｌｄ」を連載させていただいています。そちらのほうは連載中止になど、なる可能性はほぼ皆無に近いので、これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7778g/

ヒカリトヤミノゲーム

2010年10月8日15時30分発行